

宗務総長挨拶

1. 大会開催にあたって

皆さま、こんにちは。本日はようこそ、「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要 真宗本廟お待ち受け大会・本廟創立七百五十年記念大会」にご参加いただきました。

昨年から続いております新型コロナウイルス感染症の感染拡大は未だ終わることなく、依然として世界中が大きな不安と深い悲しみの中に囚われております。これまで当たり前にしてきた人と人との触れあひすらままならない中で、法義相続・本廟護持にご尽力いただいておりますことに、深い敬意と心よりの感謝を申し上げたいと思います。

さて、私どもは、来る2023年に宗祖聖人の慶讃法要をお迎えいたします。このご法要を大切な機縁として、あらゆる人々に宗祖が顕かにされたお念仏の教えを伝えていくために、「これからの教団」をともに形づくってまいらねばなりません。無数のお念仏申す方々によって護持されてきたこの真宗本廟から、本日はインターネットライブ配信という形で慶讃法要のお待ち受け大会を開催し、皆さまとともに、宗祖の御誕生の意味と立教開宗の意義をたずねてまいりたいと思います。

2. 慶讃事業の願い

(1) 「慶讃」という言葉から願われる姿勢

親鸞聖人は、仏教を日本にお弘めくださった聖徳太子を讃えたご和讃の中に「慶喜奉讃」という言葉をお残しになっておられます。そして、『一念多念文意』というお聖教の中で、

「慶」は、うべきことをえて、のちによるこぶこころなり。

とお示しくございました。

「慶讃」という言葉は、あらゆる人々を齊しく救わんと願われる阿弥陀如来のはたらきが、この私にまで伝わってきてくださったことを慶び、その恩徳にお応えしていくことであると受けとめております。

お念仏との出遇いによって、生まれたことの意味がはじめて見出された、そのことを宗祖は「慶」の一字に表しておられるのでありましょう。

このことを思います時、これまで私を育み導いてくださった方々への懐かしい思いとともに、「果たして私は本当にお念仏を慶ぶ身となっているのか」ということが問われていることを、あらためて感ずるのであります。

真宗門徒に日々のお勤めとして伝統されてきた「正信偈」には、阿弥陀如来の本願が遠くインドの地から親鸞聖人に届けられた、その深い感動が表されております。

親鸞聖人は、厳しい時代社会の中で、人々とともにそのご本願にうなずかれていかれたのであります。そのことを私たちは立教開宗のご精神としていただいてまいりたいと思います。

(2) 現代という時代

さて、現代はどのような時代であるのでしょうか。

ITやAIに象徴される科学技術は目覚ましい進歩を遂げました。より速く、便利に、快適に、と私たちが目指してきたもの、それは常に経済的、物質的な豊かさであります。そしてその裏側には多くの問題を抱えてきました。

本年は東日本大震災からちょうど10年の年であります。震災の直後に、かねて予定していた宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要は、被災者支援の集いとして勤められました。私も真宗門徒の一人として参拝させていただきました。震災をとおして無常の身であることをあらためて思い知らされるとともに、被災地の皆さまから「忘れないでほしい」とのお声を聞かせていただくたびに、一つひとつの出会いのかけがえなさに身をつまされる思いがいたします。

福島原発事故では、膨大な放射性物質が放出され、多くの方々が故郷を追われました。経済発展による「豊かさ」を追い求める結果、福島の方々に取り返しのつかない犠牲を強いてしまったのです。この福島の現実、人間の知性と技術を過信した、いわば人間の知の闇が引き起こしたものであることを忘れてはなりません。

このたびの新型コロナウイルス感染症においては、感染された方の情報がSNSなどで瞬く間に広がり、誹謗中傷の事例がたびたび報道されています。感染の拡大は防がなければなりません、感染された方々が排除され、差別されるようなことは決してあってはなりません。

かつて私たちの教団は、ハンセン病を患った方々に対して、国の強制隔離政策に加担し、患者の方のみならず、その家族の方々にまで、取り返しのつかない苦しみもたらしました。その過去の過ちを心に刻み、新型コロナウイルス感染症の現代（いま）に生かすことがなければなりません。

世界中の人々をつなぐことが容易になった現代は、同時に、常につながっていないと不安だという感情と、他者に自分の領域を侵されたくないという思いも強くなっている時代です。世界は広がったように思えますが、実は私たち一人ひとり、ますます孤独と不安を深めている、そういう時代にあるのではないのでしょうか。あらゆるいのちが相互に関係し合っている世界の中で生きているということを、あらためて見つめ直す必要があります。

(3) 他者を同朋として見出す — 慶讃テーマを手がかりとして —

では、今の時代に教団が存在する意義はどこにあるのでしょうか。

今から40年前、教団問題という未曾有の危機に直面した際、教団の本来化を願う門徒同朋の熱意によって、教団の最高規範である「真宗大谷派宗憲」が改正されました。この宗憲に、教団の目的は同朋社会の実現であるとおさえら

れています。

同朋社会とは、どんな人の上にも、互いに朋と見出していく社会でありましょう。それは、貴賤や優劣の比較をすることがない関係であります。親鸞聖人は、お手紙（『御消息広本』）の中で、

としごろ念仏して往生をねがうしるしには、もとあしかりしわがころをもおもいかえして、どもの同朋にもねんごろのころのおわしましあわばこそ、世をいとうしるしにてもそうらわめとこそ、おぼえそうらえ。

とおっしゃられています。このお手紙にある「ねんごろ」という言葉について、宮城顛先生は、

「ねんごろ」とは「根も絡む」ということである。互いに根が絡み合っているものとして生きている。相手を傷つければ、自分自身も傷つく。その人と共にしか救われぬ。そういう心を「ねんごろのころ」というのである。にもかかわらず、私たちは自分中心の心で生きている。その私が、どもの同朋にもねんごろの心を持つようにという心をたまわる。そのことが念仏者のしるしであると、親鸞聖人はおっしゃっておられる

と述べておられます。

人間は自分の都合によって他者を排除し、時には自分をも殺していくような存在であります。このような身であることをお念仏によって気づかされた時、人として本当に生きるということがはじまるのだと教えられます。だからこそ、先に歩まれた念仏者の声に耳を傾けなさい、と親鸞聖人は私たちを励まし、お念仏申すことを促されているのでありましょう。

孤独と不安の中にあっても、お念仏の教えによって自己を顕らかにし、他者を同朋と見出していくことが求められている。その意味で、お念仏の教えをあらゆる人々に伝えていくことこそが、この教団の使命であります。

このたびの慶讃テーマ「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」が、ともにそのことに思いを深めていく縁（よすが）となればと願います。

3. 慶讃事業のさらなる一歩のために

(1) 寺院の存在意義をともに確かめる機会に

真宗本廟をすべての真宗門徒の帰依処とし、全国には念仏の道場としての別院と寺院・教会があります。その一カ寺一カ寺は、地域に根ざし、地域の方々と時代をともにしてきました。

しかしながら、社会構造と人々の価値観の急速な変化もありますが、経済的・物質的豊かさを追い求めるあまり、聞法の歩みをなおざりにしてきたのではないか、そのことを今、深く顧みなければなりません。新型コロナウイルス感染症の影響が、そのことに拍車をかけ、寺院と寺院を支える真宗門徒に、困難な状況をもたらしているとするべきではないでしょうか。

しかし、わが身を思い煩う人が一人でもいるかぎり、寺院の存在意義は決してなくなりません。そのためにも、一人の人、一つの寺を大切にす、互いに

支え合う教団でありたいと願うものであります。

日ごろから寺院をお支えいただいているすべての方々にとって、このたびの慶讃法要が、ともに寺院の存在の意味をあらためて確かめる機縁となることを願わずにはおれません。

(2) 慶讃事業の基本姿勢

宗教離れと言われる時代の中で、次の世代の方々の中に、苦悩に応え得るお念仏の言葉を届け、教団に縁を持つ一人ひとりが「これからの教団」を形づくっていく、待ったなしの時機（とき）であります。

慶讃事業は、その基本姿勢として、

- 宗門の基盤づくり—新たな教化体制の構築—
- 本願念仏に生きる「人の誕生」と「場の創造」
- あらゆる人びとに向けた「真宗の教え」の発信

という三点を掲げ、寺院の教化活動を支えることに教団挙げて力を尽くそうとするものであります。そのことを皆さまとあらためて確かめ、今後、教区においてお待ち受けの事業をさらに推進していただくことを心より願います。

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、寺院における教化活動にも大きな影響をもたらしていますが、この時代に生きる智慧を、お念仏の教えにたずねつつ、教化の取り組みを進めていくことが必須であります。

それぞれの事業について、まだ十分とは申せませんが、皆さまのお力添えをたまわりながら、着実に歩みを進めてまいりたいと思います。

4. きいごに

この後、講師の池田勇諦先生にご法話をたまわります。先生には、このような状況の中、まげてお越しいただきましたこと、心より御礼申し上げます。皆さまとともに聴聞させていただきたいと思います。

本日は、「真宗本廟お待ち受け大会・本廟創立七百五十年記念大会」によるご参加いただきました。厚く御礼申し上げます。